

# 哲学とアートのための12の対話——『現代』を問う

## 第10回：「隠喩としてのウィルス」

2024年1月20日（土）14:00 京都芸術センター大広間

### 「遺伝子の夢」

人間は古代から「あの世」との交信を行なってきた。原人たちが死者の埋葬を始めて以来、人間は常に、宇宙の始原、死者たち、異次元空間、動植物や石や山などの非生物の霊らと交信を続けてきた。いや、むしろ「異界」との更新こそがヒトを「人間」にしたのだと言った方がいいのかもしれない。様々な神話や儀礼、シャーマニズムや呪術、宗教やコスモロジーの形で、異界との交信は何万年もかかって体系化され、伝播し、受け継がれてきた。

人間はこうして常に「ここではないどこか」と「いま/ここ」、非一知の空間と知の空間、無意識と意識、言語化されえないものと言語とを繋げてきたのである。あるいは、むしろそうした異次元の外部空間こそが、人間の知を根底から支え続けてきたものだったと言うべきかもしれない。

（世界は生命活動が行う「情報圧縮＝編集」に応じて出現するのであり）編集の仕方を変えれば違う現実（アナザーワールド）が現れる。言い換えれば、編集されたある「かたち」を持つ現実があるということは、編集されない無数の現実があるということなのだ。

生命は閉じたシステムではない。細胞の中にあるミトコンドリアという器官は、もともと別の生物が寄生したものだと言われている。また身体の中には無数の微生物が生きており、ぼくたちの生命活動を支えている。呼吸系や循環系を通して、ぼくたちは外部との絶えざる情報交換を行なっている。

そればかりではなく、生命はそれらの情報を圧縮し、編集し、さらに新しい形に変形して産出する。それは新しい情報の産出過程でもあるのだ。……………

清水博はその著書『生命と場所』の中で、生命を「関係子」と定義している。つまり生命とはその環境との関係を通して情報を産出する「はたらき」であるというのだ。情報と言うとき、ぼくたちは与えられた情報、つまり静的な情報を考えがちである。だが、実際は情報は別な情報との動的な関係によって常に変形され、創出されているのである。環境の中で情報を作り出し、自己組織化し、編集するはたらき——それが生命なのではないだろうか。

だが、もし人間の文化が「生命内部の情報処理システムのオーバーフロー」に由来するものだとしたらどうだろう？ 過剰となった情報は、その環境との相互作用に必要とされる以上の記憶空間を炸裂させることになるのではないだろうか？ 言い換えれば、それはイマジネールな空間としてのアナザーワールドを作り出し、場所を多数、多様化してしまうのではないか。

室井尚『哲学問題としてのテクノロジー』（講談社、2000年、p.172-182）

## 「〈私〉というシステム——思考は宇宙からの侵入者？」

どうも道に迷ったみたいだ。

ここはどこなんだろう？

ここはどこですか？

答えがないな。

まわりの様子からすると、どうやら生体の中枢神経の内部らしいけど。

強い神経興奮のパターンを感じるぞ。

ぼくが侵入したからだろうか？

でもシールドを張ってあるし、こういったタイプの生体の神経システムはぼくを識別できないはずだけだなあ。

おや、また強烈な拒絶反応が。

ということは、この神経系には、通常の生命維持機能とは別の情報処理プロセスが存在するということがしら。

どうもそのようだ。

規模は貧弱だけど、シンボル操作を行なっているシステムがあるみたい。

音声パターンと視覚印象の結びついた記号ができていているらしいけど、ちょっと検索してみよう。

....「コトバ」？「言語」？

なるほどこれがシンボル体系そのものの名称のようだ。

システムそれ自体を呼ぶためのシンボルは....「私」「自我」「意識」。

後の二つは抽象概念ということだけど、違いはよく分からないな。

とにかく、この「私」と同調して話し合ってみることにしよう。

あのう、もしもし。

こんにちは。

あっ、ごめんなさい、びっくりさせて。

えっ、ぼくですか？

ぼくはあの、あやしい者じゃありません。あなたと同じような存在、つまり能動的な情報処理活動を行なっているシステムの一種なんです。

ただぼくは可動型の、つまり一種の旅行者でして、いってみれば（なるべく混乱させないように、この生体の記憶に含まれている既存のイメージを利用しよう、えーと検索をして・・・）、そう、宇宙人なんです。

（ますます混乱している。このイメージには信憑性がないようだ。）

あ、まちがえました、ぼくは、つまりその、もう一人の「私」なんです。

前生の人格？

・・・はい、それなんですよ。

えっ、夢？

こういう交信のモードをそう言うんですか？

ええ、それならこれは「夢」です。

（どうにか納得したようだ。興奮が治ってきた。これでもう大丈夫だろう。）

よかった、だいぶ拒絶反応も消えてきたみたいですね。・・・

## 参考資料

ウイルスを「正しく畏れる」——自然界の一部であると捉えて（福岡伸一へのインタビュー）

佼成新聞DIGITAL 2021年2月4日

### ——生物学者として、コロナ禍をどのように受けとめていますか

世界中に大混乱をもたらした新型コロナウイルスの感染拡大は、生物学者の私にも全く予想できなかったことで非常に驚いています。

過去にSARS（重症急性呼吸器症候群）やMERS（中東呼吸器症候群）が流行したことがありますが、これらは致死率の高い強毒性のウイルスだったため、感染者はすぐに発症し、移動することもできません。ですから、感染はそれほど広がりませんでした。

ところが、今回の場合、無症状の人が大半です。気づかれずに人から人へと感染させてしまいます。感染者を早期に見つけ出すことが極めて困難で、その結果、症状のない人たちによる移動が感染を広げることになったのです。交通網が発達し、グローバル化が進んだこともパンデミック（世界的大流行）につながりました。

### ——ウイルスと人間の関係性はどのようなものですか

ウイルスとは、電子顕微鏡でしか見ることのできない極小の粒子です。また、生物の細胞や、細菌に比べ、非常に単純な構造をしています。単純な構造ゆえに、ウイルスは生命の起源である38億年前から存在していたと思われがちですが、そうではありません。生物の進化の過程を経て高等生物が登場しますが、その後に現れてきた、わりと新しい生命体なのです。

ウイルスは元々、生物の遺伝子の一部で、それが細胞から飛び出した断片です。その断片であるウイルスは宿主（しゅくしゅ）から宿主へと乗り移って、自然界を循環しています。その中のごくわずかなものが宿主に病気をもたらしたり、悪さをもたらしたりするわけですが、大多数のウイルスは何もせず、宿主にも気づかれないまま存在し、あるいは通り過ぎていきます。言うなれば、ウイルスは自然の一部であり、私たちの体の一部でもあります。

では、なぜウイルスが存在するのでしょうか——それは、生物の進化を加速させてくれるからに他なりません。生物の遺伝情報は親から子へ、子から孫へと垂直方向に伝わります。しかし、ウイルスの存在によって、遺伝子の一部の情報を水平方向に、あるいは種を超えて伝達することができるのです。ウイルスは生物が進化する上で必要不可欠な存在です。ですから、感染症は大きな問題ですが、撲滅や根絶を考えるよりも、ウイルスとの「共生」「共存」を目指す方が望ましいと思います。

### ——「共生」「共存」を目指す上で大事になってくることは？

「正しく畏（おそ）れる」ということに尽きます。畏れるとは、自然に対する畏敬という意味での「畏」ですね。英語では、「センス・オブ・ワンダー」という言葉になります。これは、アメリカの生物学者であるレイチェル・カーソンが最後に著した書籍のタイトルです。

彼女は、自然の精妙さ、美しさ、その成り立ちの不思議さというものに対して、尊敬や畏敬を抱くと記しています。それが自然観や生命観、あるいは生命哲学の基礎になるべきだということです。ですから、新型コロナウイルスも自然の一部である以上、「正しく畏れる」ことが必要なわけです。

ただ、「新型」という名称や未知なるウイルスに対する恐怖、さらには、感染の広がるペースがあまりにも速いことから、私たちは、感染者数の推移や感染ルートといった情報にいささか恐れ過ぎていないかと危惧しています。

もちろん、できるだけウイルスに感染しないようにする、あるいは自分が感染していたら、これを広めない努力は必要です。マスクをする、手洗いやうがいを徹底する、咳（せき）エチケットを守る、身体的な距離を保つといった基本的なことを心がけるのです。

その上で、ウイルスに対する最大の防御対策は何かと言えば、自分の体を信じることではないでしょうか。私たちの体は精妙にできていて、免疫システムという防御機能があり、大半のウイルスはこれによって撃退できるからです。

ウイルスなどの病原体が体内に入ってくると、最初は「自然免疫」が働きます。外部から侵入するウイルスを受け入れつつも、あまりに悪さをするものに対しては、これを排除する力が働くのです。病原体が自然免疫の防御を突破すると、今度は「獲得免疫」が働きます。これはリンパ球が強く働く免疫機能で、以前侵入してきた病原体を記憶していて、再びその病原体に出会うと抗体をつくり、病原体を追い払おうとします。すなわち、私たちの体には、ワクチンと同じ効果を持つ働きが本来備わっているのです。

## ——日常生活で予防に努めるとともに、大切なことはありますか

私たちは日々、さまざまなストレスにさらされています。過剰なストレスは、免疫機能を低下させます。ストレスがある時に風邪をひきやすくなったり、皮膚に不調が出たりするのはこのためです。私が推奨したいのは、良い習慣を心がけることです。それは適度な有酸素運動を続ける、入浴時にはゆったりと湯船につかる、バランスのよい食事を取る、睡眠の質を上げるといったことでしょうか。こうしてリラックスした状態で日々を過ごすことができれば、免疫システムを正常に維持することができます。それが最も効果的なウイルス対策であり、「正しく畏れる」ことに通じると思うのです。

## ——ウィズコロナの時代に求められる生命観とは？

多くの感染症は、人類に広がるにつれて、時間とともに一定程度に収束していきます。細菌やウイルスの潜伏期間が長くなるにつれ、弱毒化する傾向があります。病原体のウイルスや細菌にとって、人間は大事な宿主。その死は自らの死を意味します。ですから、病原体の方でも人間との共生を目指す方向に進化していくのでしょう。

そこで、着目したいのが「動的平衡」という生命の営みです。これは、物体としての生命は絶えず分解と合成を繰り返しているという考え方です。DNAや細胞レベルで見ると、人間はとどまることなく自らを壊しながら、つくり変えています。分子的には一年前と今の自分とは全くの別物です。

生物がなぜ自ら分解と合成を繰り返すのかと言えば、絶えず細胞をつくり替えることで損なわれるのを防ごうとしているのです。どんな物質も時間とともに劣化しますが、分解と合成を繰り返してそれを抑えているわけです。

生命は絶えず流れの中にあり、それによってバランスを保っている——私たちは動的平衡という自然の精妙さに目を向けていくべきでしょう。

そして、この動的平衡には二つの特質があります。それは、自然界の利他性と相補性です。例えば、植物は光合成をしたり、果実をつけたり、穀物にしたりしてくれているんですね。これは利他的な行為です。ただし、この利他性は、決して単なる自己犠牲ではなく、「持ちつ持たれつ」という相補性から生まれています。

要するに、人間以外の生物は全て利他性と相補性によって共存共栄しているわけです。しかし、人間だけがあたかも自然界で最も優位であるかのように身勝手に振る舞うようになってしまいました。近年、急増しているゲリラ豪雨や大型台風などの自然災害、今回のパンデミックは自然界からの警鐘ではないかと受けとっています。

ウィズコロナの時代に求められるのは、人間も自然界の一部であることを自覚し、「自利利他」の精神で生きることだと思います。